



退職なさる先生からのメッセージ

跡見の文化に感謝

鶴 光代

伝統ある跡見学園女子大学での五年間の教職生活は、この上ない貴重なもので感謝の気持ちでいっぱいです。平成十九（二〇〇七）年三月に秋田大学教育文化学部を退職し、四月に跡見学園女子大学文学部臨床心理学科に勤務することになりました。秋田大学の前は、福岡教育大学に在りまして、約三十七年間、教員養成に関わっていました。教員養成の学部における質実を良とする雰囲気や、学生、教職員の朴訥とした気質にすっかり馴染んでいました。で、跡見学園女子大学の明るさ、華やかさ、スマートさには、異文化的新鮮さを感じた次第です。この新鮮さは、こころ浮き立つもので、ここで五年間過ごすのだと、うれしくなったものです。

私の専門分野は臨床心理学で、この分野には学生が興味を持つテーマが多くあることから、本学の学生も関心を示してくれて、授業はやりがいのあるものでした。学期の終わりに、「授業を通して自分のことがよく分かるようになった」や「自分を伸ばしている気がするきた」、「ストレスをマネジメントする力がついた気がする」などの感想を聞くと、つつい顔がほころんでしまったものです。

先生方や職員の皆様には、とてもお世話になりました。いろいろな手続きや対応に戸惑っているときに何度とな

く助けていただきました。ありがとうございました。ここより感謝致しております。

退職にあたって五年間を振り返ってみると、さまざまなことが次々に浮かんできますが、緊張感を持って対応したことの一つとしては、本学大学院の人文科学研究科臨床心理学専攻が、平成二十一（二〇〇九）年度に（財）日本臨床心理士資格認定協会による実施視察を受けたときのことがあります。

当臨床心理学専攻は、臨床心理士養成大学院一種の指定を認定協会より受けていますので、その指定三年目の平成二十一年度は、認定協会による実地視察の年にあたっていました。実地視察は、認定協会の視察に関わる専門委員二名が対象となる大学院に赴き、教育環境、教育内容・方法、教員組織等について視察評価を行うものです。その視察結果は、A、B、C、保留の項目で評価され、A評価は年度によっては該当無しであったりする、結構厳しものでした。この実地視察にあたって、当時の学長嶋田先生を筆頭とする全学的組織による支援をいただき準備をしたからだと思いますが、視察評価はAとなりました。ちなみにこの二十一年度は、十三校の大学院が実施視察の対象となりその内二校がA評価を受けていました。視察評価が公表されたときに、認定協会関係者に「大学事務部門がしっかりしているところが結局は評価が高い」といわれました。まさにその通りで、全面的にご助力いただいた渡邊教務課長をはじめとする教務課の皆様には感謝でいっぱいです。

文京キャンパスに真新しい二号館ができて間もなくの平成二十一（二〇〇九）年に、一般社団法人日本心理臨床学会第二十八回春季大会を、大学当局の皆様と臨床心理学科の先生方のご協力の下に開催させていただきました。三、五二五名の会員が参加しましたが、立派な校舎と行き届いた設備に感嘆していました。この二十八回春季大会では、併せて日本心理臨床学会が一般社団法人となった記念の式典をブロッサムホールで行わせていただきました。この式典には、日本心理学会をはじめとする心理学関係の諸学会からご出席をいただきましたが、これも大きな思い出となっています。

学会開催繋がりで思い出となっているのは、平成二十一（二〇一〇）年に文京キャンパスで開催させていただいた第十八回日本臨床動作学会大会のことです。記念すべきは、大会の発表論文集の表紙に跡見花隠先生の『秋虫瓜蔬図』を使わせていただいたことです。この図は、花隠記念資料館で作成されている一筆箋の表紙になっていて、とても心を引かれていました。學術大会が九月に開催されることもあり、何とかこの図を表紙に使わせていただけないものかと、おそろおそろる資料館に尋ねましたところ、資料館HP上のバーチャルミュージアムに載っているこの図を使ってよいと許可をいただきました。

バーチャルミュージアムにある『秋虫瓜蔬図』の解説には、「自画賛によれば、この絵を見た客人が、『どのような手本を見てこれを描いたのか、明のものか、清のものか、それともわが国の元禄時代の作家のものか』と尋ねたところ、花隠は笑いながら菜園を指差し、『私の手本はここにある』と答えたという」とあります。

明治維新という激動の時代を自立的な女性として活躍した花隠先生の生き方を、手本を元に描くのではなく自己のオリジナルな世界を描くという姿勢に見た思いで、心が引き締まりました。

この表紙は、会員に大好評でした。表紙の裏には、バーチャルミュージアムにある解説を借りて、「登場する野菜類は、糸瓜（へちま）、南瓜（かぼちゃ）、紫茄（なすび）、鬼灯（ほおずき）、玉蜀黍（もろこし）で、胡蝶（こちょう）、寒蟬（ひぐらし）、蝻斯（きりぎりす）、絡緯（くつわむし）、蜻蛉（とんぼ）、蝸牛（かたつむり）、蟪蛄（かまきり）、蚊などの秋の虫とともに描かれている」と載せました。この解説にも興味を持つ人があり、秋の虫のそれぞれが何処に描かれているのかを探し合う若い会員もいて、『秋虫瓜蔬図』をめぐって賑やかな場面がみられました。ちなみに、『蚊』が一番見つけにくいようでした。（花隠先生、若い人は真面目ではあったのですが、楽しんでしまつてごめんなさい。）

平成二十三（二〇一一）年は、誰もが、東日本大震災に心を痛め、その災害から立ち上がっていく年でした。跡見学園女子大学も新座キャンパスの校舎に被害が出て一ヶ月余り新学期開始が遅れましたが、山田学長を初めとす

る教職員の努力で短期間に通常体制に戻ることができました。こうしたなか、災害への自己対策意識が強まり、また、災害ボランティアへの関心も高まりました。

心理臨床に携わる者は、日頃から被災時の人の心理状況とそのケアについて研修しているものの、今回の大震災では大津波や放射能汚染の問題があり、新たな研修を付加する必要がありました。事は急いでいて、三月二十三日に設立した東日本大震災心理支援センター主催の研修会を跡見の文京キャンパスで開催させていただきました。このセンターには、臨床心理学科の先生方がボランティアスタッフとして関わってくださり、研修会の運営の主力は跡見関係者が担いました。というのも、この研修会に、臨床心理士となった大学院臨床心理学専攻修士者や大学院生が自発的に参加の意志を寄せてきて、当日運営の中心となったからです。それは、研修もさりながら母校で開催されるこの研修会を少しでも手伝いたいという気持ちからのものでした。修了生や大学院生達が、自らの社会的役割を果たそうとしている姿を見て、人を支援する専門家として成長していることを実感しました。

この大震災では、学校の児童・生徒、教師、保護者への支援も最重要課題でした。文部科学省は、緊急の学校支援スクールカウンセラーの派遣を計画し、その協力を心理支援センターに依頼してきました。被災三県に延べ数百人の臨床心理士を送ることは至難の業でした。そこで、臨床心理学科の先生方に緊急スクールカウンセラーとしての参加を相談したところ、大学から許可が出れば是非被災地に赴きたいというものでした。さっそく、山田学長、大塚副学長、奈倉学部長に相談を申し上げ、大学当局の理解ある許可をいただき、五名の教員が岩手県のある学校に、週替わりでリレーしながら五週間担当しました。宿泊先から、テレビに映し出される大津波の被害そのままの町跡を通り抜けて学校に通い、肉親を喪い、家を無くした生徒たちの、無念、悲哀、気力の弱まり、自責の念といった気持ちに向き合いました。また、生徒と同じような重い痛みを受けていながら、早くも立ち上がり学校の平常活動に力を尽くしている教職員にもできるだけの支援を行いました。また、保護者支援のために、遠くにある避難

所まで訪問面接に出かけました。こうした非日常場面での支援こそ、日常の心理臨床力が問われると自分に言い聞かせ平常心に務めたものでした。

跡見学園女子大学での五年間を振り返ろうとしたとき、幾つかの道筋が湧いてきましたが、結局、ここに記したようなことが浮き出てきました。以前は、なぜ、その筋を私の無意識は選んだのかを自己分析したのですが、定年退職を目の前にするそれなりの年齢になったからか、いまは、そうしたことに関心が向かなくなっています。何に関心が向いているかという点、自己への「なぜ」という問いではなく、自ずと湧いてくる「こうありたい」という思いそのものについてです。できるだけその思いに沿って生きていきたいものと思うしだいです。

私なりの跡見花蹊先生イメージは、自分の判断の下に活動する女性、他にとらわれることなく自己実現を目指す女性です。こうしたイメージをいだくのは、私の今の無意識がそうした女性にアコがれているからでしょう。跡見学園女子大学にお世話になったからこそ、跡見の伝統に触れたからこそ、あらためて「こうありたい」という思いが浮かび上がってきたのだと思います。跡見の文化に厚く感謝致します。

鶴 光代（つる みつよ）



生年月日（出生地）

昭和十七（一九四二）年一月二十六日（福岡県）

学 歴

昭和四十一（一九六六）年三月 福岡学芸大学中学校教員養成課程社会科学卒業

昭和四十二（一九六七）年三月 福岡教育大学専攻科教育心理学専攻修了

昭和四十四（一九六九）年三月 九州大学大学院教育学研究科修士課程教育心理学専攻修了

昭和四十五（一九七〇）年九月 九州大学大学院教育学研究科博士課程教育心理学専攻退学

職 歴

昭和四十五（一九七〇）年十月 福岡教育大学保健管理センター

講師

昭和五十三（一九七八）年十月 福岡教育大学保健管理センター

助教授

平成十二（二〇〇〇）年 四月 秋田大学教育学部教授

（平成一十九年三月）

平成十五（二〇〇三）年 四月 秋田大学教育学部附属幼稚園

園長（併任）平成十八年三月）

平成十九（二〇〇七）年 四月 秋田大学名誉教授

平成十九（二〇〇七）年 四月 跡見学園女子大学文学部臨床心

理学科教授（平成二四年三月）

平成二十（二〇〇八）年 四月 同心理教育相談所所長

（平成二四年三月）

主要業績

著書

『臨床心理学大系18 心理臨床の展開』（金子書房 二〇〇〇年十

月）（編・著）

『心理学』（ミネルヴァ書房 二〇〇二年六月）（共著）

『実践！スクールカウンセリング』（金剛出版 二〇〇二年七月）

（共著）

『障害のある人を支える』（慶應義塾大学出版会 二〇〇二年十一月）（共著）

『健康・治療動作法』（学苑社 二〇〇三年六月）（共著）

『教育動作法』（学苑社 二〇〇三年十月）（共著）

『よくわかる臨床発達心理学』（ミネルヴァ書房 二〇〇五年四月）

（共著）

『臨床動作法への招待』（金剛出版 二〇〇七年三月）（単著）

『動作のこころ 臨床編』（誠信書房 二〇〇七年八月）（共著）

『発達障害児への心理的援助』（金剛出版 二〇〇八年九月）

（編・著）

『学生相談ハンドブック』（学苑社 二〇一〇年二月）（共著）

学術論文

『発達障害児への心理的援助―広汎性発達障害を中心として―』

社団法人 日本精神科病院協会日本精神科病院協会雑誌 第

二十八巻第八号 二〇〇九年八月

『臨床動作法 精神科治療学』精神療法・心理社会療法ガイドラ

イン 第二十四巻増刊号 星和書店 二〇〇九年十月

『セラピストの基本的態度』臨床心理学 増刊第一号 金剛出版

二〇〇九年十月

『こころを支援する』臨床心理学 増刊第二号 金剛出版 二〇

一〇年九月

『親子面接と臨床動作法アプローチ』臨床心理学 第十巻 第六号

金剛出版 二〇一〇年十一月

『臨床技法としての面接を考える』臨床心理学 第十一巻第二号

金剛出版 二〇一一年三月

『子どもの不安を癒す心理療法』教育と医学 第五十九巻十号

慶應義塾大学出版会 二〇一一年十月

『心理臨床学事典』日本心理臨床学会編・編集委員長 丸善出

版 二〇一一年八月

学外からの委嘱

大学評価・学位授与機構 大学評価委員会 専門委員

（二〇〇二年八月～二〇〇四年三月）

日本学術振興会 科学研究費委員会 専門委員

（二〇〇三年一月～二〇〇三年九月）

日本学術振興会 特別研究員等審査会 専門委員および国際事業委

員会 書面審査員（二〇〇五年八月～二〇〇七年三月）

武蔵野大学大学院 教員資格審査委員

（二〇〇五年十二月～二〇〇六年二月）

愛知学院大学 外部評価委員（二〇〇六年二月～二〇〇六年十月）

文部科学省研究振興局学術機関課「特色ある共同研究拠点の整備

の推進事業」専門委員会 委員

（二〇〇九年三月～二〇一一年三月）

財団法人大学基準協会 平成22年度大学評価委員会心理学系第二

専門評価分科会 主査（二〇一〇年四月～二〇一一年三月）

学会活動

- 一般社団法人日本心理臨床学会 理事長（二〇〇六年十一月～現在）
- 日本催眠医学心理学会 理事長（二〇一一年九月～現在）
- 日本教育催眠学会 理事長（二〇〇四年二月～現在）
- 日本臨床動作学会 常任理事（二〇〇二年七月～現在）
- 日本心理学諸学会連合 副理事長（二〇一一年七月～現在）

社会における活動

- 臨床心理職国家資格推進連絡協議会 会長（二〇〇六年十一月～現在）
- 一般社団法人日本臨床心理士会 理事（二〇〇六年十一月～現在）
- 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 理事（二〇一〇年八月～現在）
- 東日本大震災心理支援センター 副センター長（二〇一一年四月～現在）

賞罰

- 日本リハビリテーション心理学会 学会賞（二〇〇五年十一月二六日）